

<ユネスコ本部（フランス）>

(United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization)

=ユネスコ International Commission on Education=

アジア太平洋デスク担当官 Abdel. W. A. Yousifさんのお話。

国連の教育科学の部を担うユネスコの中で、ICEはユネスコ憲章当初にはなかった機構。

Secondly, High, Adult.

人が一生涯生きる中で、現代のように変化のある時期は、過去にない。そのため、システムとして、リカレント学習の再構築をめざしている。

ユネスコが、現在優先にしているのは、

- 1 識字。すべての子どもたちに教育の機会を。そして、成人に対しても。
- 2 女性の地位向上。女性に対等な地位の確立をめざしている。
- 3 平和教育。Cultural Peace=Peace Constructure
第2次大戦後、国際相互理解、つまり文化としての平和の構築。

現在、186人のメンバーによって優先的な政策を決め、他のILO、ユニセフとも協力している。持続的な開発を第3世界に行ない、最終的な目標としているのは、平和である。

先進国の過去30年間のモデル政策は、成功とはいえない。世界的な調和、秩序が、必ずしもとれているとは限らない。

平和の中で互いが協力していくためにはこれまでとは違ったモデルが必要ではないかと思っている。

1億3000万人の子どもが学齢でありながら労働や、路上生活のため学校に行けずにいる。

8億8000万人の文盲、そのうち3分の2は女性で、アフリカ、東南アジアに特に多い。100万人の子どもたちもこのまま行くと文盲になってしまう。

アルファベットや数字が読めない人が多いのは、世界経済としても、問題ではないか。

国際協力は不可欠であり、日本からはアジアへの財政援助を受けている。

500万ドルを女性教育に援助してもらっている。

外務省からは、アソシエートエキスパートというシステムで、このユネスコにも2年間研修に派遣されている。

=ジャック・ドロール EU委員長のレポート=

1985年、かのポール・ラングランが、ユネスコICEにおいて、学習権宣言をしたことは、多くの知るところである。

教育の質が変わり、世の中の変化のスピードは早く、生涯において1つの大学卒業証書だけでは、通用しなくなっている。そして、その後その理念をレポートしたフォールの報告、「Learning to have (お金や力を得るために学ぶ) から、第3の学習である Learning to be (いかに生きるために 学ぶか)」といった理念を実現しているのは日本を含めて数カ国である。

今回、EU委員長であるジャック・ドロールから「21世紀に向けての教育」のレポートが、改めて出された。これはフォールの報告とは違い、文化、政治的開発も含めて提案している。

グローバリゼーションつまり、相互依存、地球村とっていいのに、互いが違いをしらなすぎることから、世界平和がうまく進まないのだと、現状分析と、政治開発など、教育の分野にとどまらない色々な問題を提示している。

大きく整理すると

- 1 **Learning to know**= 学び方、学ぶ技術、学ぶ楽しみ。
- 2 **Learning to do**= 実生活と切り離せない、生きた学習。
- 3 **Learning to be**=社会に出て、正しい判断ができるように。
- 4 **Learning to live together**=現在の世界状況に最も必要な、フォーマル、インフォーマルによらない基本的な教育理念。互いに寛容な心を持つことへの教育は、先進国でも必要である。教育の質の向上を。

*このレポートは、原文をいただいたので、少しづつ訳したいと思っている。

E d u c a t i o n i s P u b l i c A s s i s t=つまり、教育は公的な資産である。

基礎学習は、基本的な人権であり、大人、子どもの区別なく援助するべき。

こうしたことを、利益優先の民間市場にまかせては、決してならない。まかせてしまつては、排除される人が出てしまう。ただし、個々の文化的なものは、各自がお金を払ってもよいと思う。

=女性教育担当官 Ms. N. Aksornkool より=

最初に自己紹介したときに、私が女性の学習のプログラミングもしていると話したため、日本の公民館での女性の学習について、私が名指しで質問され、答えることになった。

Q 日本の公民館では、女性の地位向上に関する学習をしているのか。また、学習の方法に関して、工夫をしているのか。

A もちろんしている。ただし、日本の場合、あからさまな差別はなくなってきているので、この100年間に伝統的にしみついている性別役割分業意識の払拭と、女性がせっかく持っている力を発揮しきれていないことの問題と、その解決について、学習するようにしている。

特に、日本ではまだまだ女性は男性よりも一歩退くべきと、男女ともに思っている人が多いので、女性のエンパワーメントのための学習に取り組んでいる。また、このように女性自身の意識の変革や、持っている力を発揮できるようにするためには、講義を聞くだけの学習ではだめなので、学習方法についてもいろいろ工夫し、新しいものを開発するようにしている。(私の実施した学習の事例の資料を送ることを約束した。)

Ms. Hadanoのいうとおりだ。これからももっと頑張ってもらいたい。先進国では女性の地位向上に関しての問題が見えにくくなっているが、まだまだ努力が必要だと思う。

そうすると、彼女は私にむかって日本語で「ねえー！」と相づちを求めてきた。うれしくなって、「ねえー！」と言り返す。急にユネスコが身近になった気がした。

Mr. Yousifは、様々な情報を今後交換するきっかけにしたい、と言ってくださり、また、第3世界に日本政府がこれまでのknow howを生かし公民館を創ってくれたらうれしいとも言われた。

アジア太平洋デスク担当官 Mr. Y. Kitamuraにもお世話になった。

通訳は 白仁 たかしさん。